

討 議

土木學會誌 第十五卷第四號 昭和四年四月

ハンブルグ港

(第十三卷第一號第五號及第十四卷第一號所載)

著者 會員 工學士 木 津 正 治

拙著ハンブルグ港に就て、會員田村與吉君から第十四卷第一號に於て討議を寄せられたのは、著者の誠に光榮とする所であります。

田村君は著者よりも2年後のハンブルグ港を御視察なされて、著者の視察後の様子を御教示下されましたのは甚だありがたく存じます。又同討議中には獨りハンブルグ港のみならず、一般の港灣に就ての御視察談もありまして、大變に有益に拜讀致しました。御討議を通讀致しますと、田村君の御視察談を御洩し下されたのが主な様に認められて、特に著者が御返答申上ぐべき事項もない様であります。しかし、なかには、著者の筆が拙くて完全に意味を言ひあらはし得なかつたために、同君の御了解を聊か濁らしたらしい點が二三ありまして、甚だ恐縮致して居ります。これ等に對して此の機會に於て、更めて補足させて戴きます。

第一 著者がハンブルグ港の將來に對して幾分悲觀説を立てましたら、田村君は之を餘程深刻な意味にとりて、恰も當港は將來衰微すると主張するものゝ如くに御了解下されたらしくありますが、著者の眞意はそんな極端なものではなく、當港は將來は益々發達するだらうけれども、其の發達の度合が戦前の様な躍進的ではなく、多少にぶるだらうと想像したのであります。

第二 當港と其の姉妹港たるクツクスハーフェン港との關係を述べまして、ク港は現在は餘り利用されては居らぬが、將來は少しく餘計に使用されるであらうと申し上げた積りでありますが、田村君は港の重心が、將來はク港に移動するかも知れぬと推定して居る様に御了解下されたらしいですが、こんな事は著者は夢想だも致して居らぬのであります。

第三 當港は著者の言ふ程に盛大なる工業地ではないと、筆者より御叱正を蒙りましたが、これもまた著者の筆が足らず、十分に意味を御傳へする事が出来なかつた様であります。著者と雖も亦、當港は一大工業地だと思つては居りません。唯、從來は、餘りに商業地として有名であるので、工業地であることが自然に蔽はれる傾きがあるが、實際はなかなかそうでなく、工業も随分盛んで、其の發達には大にちからこぶを入れて居ると申し上げた積りで

あります。

筆者は工業的背景のないのが當港の一大缺陷であると喝破されましたが、著者も亦其の意を同じふするものであります。昔の様に、一般の商取引が仲繼貿易のみであつて、原地取引の少なかつた時代には、港の機能は獨り商業にのみ止まつたでありました。しかし、現代の様に、通信並に交通機關が發達して、原地取引を容易ならしめ、大に其の發達を誘致した時代になりましては、港に於ける仲繼貿易は追々減少する傾向を生じましたので、港の商人は之より口錢をとりて、甘い汁を吸ふことが、昔の様に出来なくなりました。

之れに反して工業は、港に於ける交通機關の便益に誘導されて、奥地より港に進出する傾向が甚だ顯著になりました。茲に於て近代の港は何れも工業的背景を重んずる様になりました。ハンブルグ港に於ては此の背景が現在では餘り濃厚ではありませんのは、著者も亦筆者と共に大に遺憾とする處であります。しかし、將來は大に發達する可能性があるらしくあります。従來の工業は主として自由工区内で営まれて居りまして、其の種類も餘り多くなく、造船業並に其の附屬工業が主でありました。自由工区内では、初めには種々の工業が営まれたが、此の区域内では法規上種々の制限に束縛されるので充分に發達することが出来ず、其の内から造船業並に其の關係工業のみが残つたものだ相であります。しかし最近自由工区以外に於て種々の工業が営まれる様になりました。

港其の者を擴張するには、當港の州域内には最早や其の餘地がないので、之を他州に求めねばならず、此のために幾多の困難を嘗めつゝありますが、工業に適する地域ならば、之をエルベ橋の上流に求むれば大變に澤山ありまして、所謂州域問題とは關係なしに自由に擴張し得ます。此の方面の經營は其の計畫も定まり、已に事業に着手しましたから、將來は大に盛んになる事と存じます。

第四 Moldauhafen の上屋の前面の水深は ± 0 では場所柄として淺過ぎると御指示下されましたが、之は同君の御読み違ひらしく、 ± 0 は Hamburger Null を標準にしてありますが、こゝでは M.N.W. は $+3.3$ m ですから、これだけの水深があるのであります。

第五 本文には、倉庫と上屋の兼用は失敗したと報告してあるが、これは今少しく考慮の餘地はないかと、筆者より御注意下さいましたが、此の邊も亦著者の書き不足で充分に眞意が表はれて居りません。著者の意味は、倉庫と上屋との兼用（若くは合同）が失敗したと云ふのではなくて、上屋内の作業を厭ふて、之を廢すために、岸壁の直前に、倉庫を造つたが、豫想に反して、上屋の手数が除かれはしなかつたので、此の點に於て不成功に終つたと云ふのであります。

海運業が現代の様に分化しなかつた昔では、船舶も荷物も亦倉庫も、其の所有者は多くは同一人でありました。此の時代には、船主は自分の倉庫の前にすぐ船を付けたので、上屋と

云ふものは全然なかつたのであります。これは日本でも、つい最近までかうでありましたが、彼地でも亦、昔は、同様であつた相であります。従つて、岸壁の直前に倉庫を置くと云ふ事は、あながち新奇な創意ではなく、全く舊慣に忤んだものであります。然るに現在に於ては海運業が幾多の分業に分れ、船舶と倉庫とは全く其の所有者を異にするに至りたるのみならず、其の規模も大變に大になつたので、船は必ずしも或る特定の倉庫に入る荷物ばかりを積んでは來ず、またそれより出る荷物のみを運んでは行かなくなりました。従つて此の間の關係を圓滑に處理するには、どうしても上屋が必要になつたのであります。此の情勢の變化を無視して、岸壁の直前に一大倉庫を立てたので、失敗したのであります。

話は横道に這入りますが、著者の意見では、従來の様に上屋と倉庫とを別棟にするのは最早や幾分舊式で、それよりは兩者を合體して建てるのが、寧ろ近代式ではないかと思ふて居ります。此の意味に於ては、上記の倉庫は或は怪我の功名をして居るとも稱し得られむこともないのであります。

以上で御返事を止めさせて戴きますが、此の機會に於て著者より筆者に御教示を仰ぎたいことがあります。それは所謂大ハンブルグ港問題の其の後の成り行きであります。御承知の通り、此の問題はプロイセン州の地域を合併せなければならぬので、日本で申さば他府縣の町村を合併せんとするのと同じでありますから、なかなか一朝一夕にまとまる話でないことは、日本の實狀に徴しても判ります。

しかし、同港としては必要と云ふよりは、寧ろ生死の問題ですから、必死の努力を致しまして、何時かは成功せねば止まぬことと存じます。著者の滯獨中には何等解決の曙光は見へぬ様でしたが、最近の情勢がどんなですか、承ることが出来れば大變に仕合せに存じます。